

2021年12月26日年末礼拝

『砂の上の足跡』

イザヤ46:3~4

聖書箇所

**3 ヤコブの家よ、わたしに聞け。**

**イスラエルの家のすべての残りの者よ。**

**胎内にいたときから担がれ、**

**生まれる前から運ばれた者よ。**

**4 あなたがたが年をとっても、**

**わたしは同じようにする。**

**あなたがたが白髪になっても、**

**わたしは背負う。**

**わたしはそうしてきたのだ。**

**わたしは運ぶ。**

**背負って救い出す。**

導入

皆様、おはようございます。そして、お久しぶりです。私は9月から11月までサバティカル休暇をいただき、12月に復帰しました。サバティカルの3ヶ月間は感謝の溢れる時間でした。時間をとても贅沢に使うことができたと思います。家族の時間を持つことも、神様との時間を持つことも、たっぷりできました。毎日のように息子と遊び、紅葉に色づく自然を家族で満喫し、おいしいものを食べ、一人の時間には運動も毎日しました。何よりも神様にぶつかっていくことができた3ヶ月だったと思います。自分の弱さを神様の前に曝け出し、神様からまた立ち上がる力を頂いたと確信します。すばらしいリフレッシュの時でした。3ヶ月間のサバティカルをいただけたこと、その間、たくさんの方々に助けて頂いたこと、何よりも、私のことを祈りに覚えてくださった、たくさんの方々に心から感謝申し上げます。

さて、2021年もいよいよ残りわずかとなりました。今日が最後の日曜日です。韓国では1年を振り返るときに多事多難という言葉をよく使用します。多くのことがあり、多くの問題があった、という思いで1年を振り返るのですね。この1年は皆さんにとってはどのような1年となったでしょうか。

私にとってこの1年は忘れられない1年となりました。それは、3月に息子の要依が生まれたからです。きっとこれから何年が経過しても、この2021年を忘れることはないなと思えるほど、特別な年になりました。

息子は皆さんの祈りに支えられすくすく成長し、今はもう9ヶ月になりました。私と息子を見て、よく似ている、なんてことを言うてくださる方々がたくさんおられます。要依の献児式の時には、洪師から要依君を見ると実は国憲先生がイケメンだったということがわかる、なんて言うていただきました。

私が父親として彼が私に似ているなあと特に思うところが二つあります。それは、体が大きいところと、甘えん坊というところ。息子は平均的な9ヶ月児の数値よりも大分大きく成長しました。赤ちゃんの身長と体重を測る成長曲線と言われるものはあるのですが、その平均値を大きくはみ出しています。そして、甘えん坊なんです。まあ、赤ちゃんはみんなそうかもしれないのですが、息子は抱っこされるのが大好きで、私が家に帰ると真っ先に抱っこをするようにせがみます。ただ体が大きいので、重いんですね。ずっと抱っこをしていると腕がだるくなってきてしまいます。でもおろそうとすると泣いてしまうので、ずっと抱っこをするしかないのです。すると、そのうち、息子は私の腕の中で眠ってしまいます。眠っている息子は安心しきっている顔をします。抱っこされて安心することができたのでしょう。

抱き抱えられて安心する、心が軽くなるというのは何も赤ちゃんに限ったものではないでしょう。さすがに大人になってから抱っこをされるというのはほとんどないと思いますが、心が重かったり、落ち込んだりした時に、愛する人から抱きしめられ安心することができた、というのは年齢に関係なく、皆が経験するものであると言えます。

さて、先ほどお読みした聖書箇所には背負うという表現が出てきます。胎の中にいる時から、白髪になるまで、神様がその民を背負ってくださると。神様に背負われる時、私たちはどのような気持ちになるのでしょうか。この1年も私たちが背負ってくださっていた神様を、私たちはどのように感じていたのでしょうか。年末礼拝のこの時、1年を振り返りながら、このみことばを通して神様が私たちが背負ってくださっているということを共に考えていきましょう。

## 本文1：神様は私たちが背負われる方

イザヤ書46章はバビロンという帝国の偶像の神々と神様を比較している表現が登場します。バビロン帝国というのは当時最強の力を誇っていた大国でした。当時の強国とは戦争で強い国のことを言い、当時の戦争というのは神々の代理戦争であるという意味を持っていました。つまり、強国であればあるほど、偶像の神々が蔓延っていたのです。強大な力を誇っていたバビロン帝国は偶像の神々の力もまた強大であったといえるのです。同じイザヤ書46章の1～2節をご覧ください。**イザヤ46:1～2**

- 1 「ベルはひざまずき、ネボはかがむ。  
彼らの像は獣と家畜に載せられる。  
あなたがたの荷物は、  
疲れた動物の重荷となって運ばれる。
- 2 彼らはともにかがみ、ひざまずく。

**重荷を解くこともできず、  
自分自身も捕らわれの身となって行く。**

ベルというのはバビロン帝国が信じる神々の主神でした。ベルという言葉には主人という意味があり、全ての神々の父として信じられていました。また、ネボというのは知恵を司る神々です。最強の国であるバビロン帝国で信じられた神々であるベルとネボは有名で、多くの人から自分達を守り、導いてくれる存在として信じられていたのです。ベルとネボを信じているからこそ、戦争に負けることなく、繁栄し続けることができるのである。しかし、聖書はそんな絶大な信仰を集め、力を持っているとされていた神々がひざまずき、かがむと言うのです。なぜなら、彼らは信じているものを救うことができない偶像だからなのです。

いくら戦争が強く、強大な帝国で信じられていたとしても、その神々は家畜に載せなければ移動することもできず、動物すら救うどころか、疲れさせるだけというのが、現実なのです。強大な力があると信仰を集める神々でしたが、実は動物や家畜なしでは動くことすらできないほど、なんの力も持っていません。

目には強大に見えるものはたくさんあります。目には素晴らしく見えるものも溢れるほどあります。それらは救いをもたらしてくれるように見えるでしょう。守ってくれていると安心することもあるかもしれません。時にはそれらが力を与えてくれると、そう思えて仕方がないでしょう。バビロン帝国が信じていたベルやネボがそうであったように。しかし、結局は重荷になってしまうものばかりなのです。安らかにしてくれるのではなく、疲れさせてしまうものなのです。

### **3 ヤコブの家よ、わたしに聞け。**

**イスラエルの家のすべての残りの者よ。**

**胎内にいたときから担がれ、**

**生まれる前から運ばれた者よ。**

### **4 あなたがたが年をとっても、**

**わたしは同じようにする。**

**あなたがたが白髪になっても、**

**わたしは背負う。**

**わたしはそうしてきたのだ。**

**わたしは運ぶ。**

**背負って救い出す。**

4節だけでもわたしという言葉が5回登場します。他の何者でもなく、神様だけが私達を背負ってくださることが強調されているのです。神々に対し、神様は背負わせる方ではなく、背負ってくださる方であるといえます。しかも、生まれる前から、白髪になるまで。

生まれる前から運ばれた者よ。とありますが、英語の聖書ではわたしから生まれた者と翻訳されていることもあります。神様により生まれた者、神様が唯一自分を救ってくださると信じている者を神様は、その人生のすべ

ての過程をともにいてくださり、そして、背負って救い出される方であるということです。

昨日はクリスマスでした。世界中の教会では、クリスマスをお祝いしました。全世界に光がもたらされたことを覚え喜んだのです。それは、私たちがイエス・キリストによって神様の子となった喜びです。**ガラテヤ3:26**

## **26 あなたがたはみな、信仰により、キリスト・イエスにあって神の子どもです。**

私たちの人生はその最初から最後まで、すべて私たちの父である神様がともにいてくださいます。どんな時であっても、子である私たちを背負ってくださいます。私たちは幼子が親の腕の中で安心することができるように、背負ってくださる神様がおられることで平安を得ることができるのです。

## **本文2:砂の上の足跡**

しかし、ここで一つの疑問が浮かんできます。神様が人生のすべてでともにいてくださるのなら、神様が背負ってくださるのなら、私たちにはなぜ苦しみがあるのか、ということです。1年を振り返るまでもなく、半年を振り返ってみても、3ヶ月を振り返ってみても、1ヶ月を、1週間を振り返ってみても、苦しかった記憶を探すのは簡単なことでしょう。もしかしたら、今この瞬間にも苦しみの中にいるんだという方もいるかもしれません。一体なぜ、神様が背負ってくださっているはずの人生の中で、このような苦しみがあるのでしょうか。

それは、私たちが神様を忘れてしまうからなのです。二箇所のみことばから確認してみましょう、まずは**伝道者3:11**

**11 神のなさることは、すべて時にかなって美しい。神はまた、人の心に永遠を与えられた。しかし人は、神が行うみわざの始まりから終わりまでを見極めることができない。**

神様のなされることはすべて時にかなって美しい。だから、その時のめぐみを思って、神様の御心に思いを寄せ、神様のされることに期待しよう。そんな希望をくれる、辛い時には力をくれる、めぐみの時に感謝を思い起こさせてくれるようなみことばです。でも、このみことばはここでは終わらないのです。神はまた、人の心に永遠を与えられた。しかし人は、神が行うみわざの始まりから終わりまでを見極めることができない。と続きます。私たちはこのこともまた心に留めておく必要があるのです。

全知全能の父なる神様がなさることは時にかなって美しいとありますが、ここで美しいという言葉は完璧だという意味があります。神様がなさることはその全てが完璧で、そして、神様の御業がなされる時もまた完璧だということになるのです。もっと簡単に言えば、神様がなされることに間違いはないということですね。

聖書で永遠とは神様のことを表します。人の心に与えられた永遠とは、罪によって、死がある、つまり、限りが

ある人が、神様の救いにあずかるという事を意味するのです。永遠、限りがないと言うことは死がないと言うこととなります。神様は罪ある人間を救おうとされます。死んで終わりなのではなくて、救われて永遠の祝福を受けることを望んでおられるのです。それが神様の望みであり、そのためにみわざを行われます。神様が望まれるのは私たちが救われ祝福を受けることなのです。そして、人の心には救いを求める、神様を求める思いが与えられているといえます。

しかし人にいくら永遠の思いがあっても、救いを望んでいても、祝福を渴望していても、それはどのように始まって、どのような結果になるのか、人には知る事ができません。神様なさることは、神様の御計画は思いもよらないところからなされるのです。

このことを踏まえた上で、もう一箇所みことばを読んでみましょう。**イザヤ49:14~16**

**14 しかし、シオンは言った。**

**「主は私を見捨てた。**

**主は私を忘れた」と。**

**15 「女が自分の乳飲み子を忘れるだろうか。**

**自分の胎の子をあわれまないだろうか。**

**たとえ女たちが忘れても、**

**このわたしは、あなたを忘れない。**

**16 見よ、わたしは手のひらにあなたを刻んだ。**

**あなたの城壁は、いつもわたしの前にある。**

神様の美しい時と、人が思う最善の時には違いがあります。だから人は、神様が私を忘れてしまった、この苦しみは神様が私を見捨ててしまったからだ、と感じてしまいます。しかし、神様は決してご自分の民を忘れないと言われます。手は体の中で一番よく目にする部位です。そのよく見る手に神様はご自分の民を刻まれたのです。二度と消えることがないように。神様は何があっても決して私たちが忘れることがないようにされているのです。

聖書が記された時代の習わしとして、手に人の名前を刻むということは、その人が誰のものかをあらわすものでした。神様の手に私たちの名前が刻まれている。それは、神様自らが私たちのものとなってくださったということなのです。私たちが神様のものだという事だけでなく、神様も「私たちのもの」となってくださったということです。

また、城壁が神様の前にある。このことは神様が私たちを守ってくれることをあらわしています。たとえ今にも崩れ落ちそうな、ボロボロな城壁であっても、神様がその前にいてくださるなら何物も破ることが出来ない強固な守りとなります。私たちが忘れない神様は私たちが大きな愛で守り導いてくださるのです。

そんな神様を私たちはいつも覚えていることができているでしょうか。

今日のメッセージ題は『砂の上の足跡』ですが、これはクリスチャンの間で親しまれている有名な詩の名前です。FOOTPRINTS というワーシップの歌詞の元になっているので、ワーシップを通して知っておられる方も多いのではないかと思います。どのような詩であるか、お読みいたします。

ある晩、男が夢をみていた。

夢の中で彼は、神と並んで浜辺を歩いているのだった。

そして空の向こうには、彼のこれまでの人生が映し出されては消えていった。

どの場面でも、砂の上にはふたりの足跡が残されていた。ひとつは彼自身のもの、もうひとつは神のものだった。

人生のつい先ほどの場面が目の前から消えていくと、彼はふりかえり、砂の上の足跡を眺めた。

すると彼の人生の道程には、ひとりの足跡しか残っていない場所が、いくつもあるのだった。

しかもそれは、彼の人生の中でも、特につらく、悲しいときに起きているのだった。

すっかり悩んでしまった彼は、神にそのことをたずねてみた。

「神よ、私があなたに従って生きると決めたとき、あなたはずっと私とともに歩いてくださるとおっしゃられた。

しかし、私の人生のもっとも困難なときには、いつもひとりの足跡しか残っていないではありませんか。

私が一番にあなたを必要としたときに、なぜあなたは私を見捨てられたのですか」

神は答えられた。「わが子よ。わたしの大切な子供よ。わたしはあなたを愛している。私はあなたを見捨てはしない。

あなたの試練と苦しみのときに、ひとりの足跡しか残されていないのは、その時はわたしがあなたを背負って歩いていたのだ」

2021 年の最後を迎えるこの時、1 年歩んだ足跡を振り返ってみましょう。その足跡は1つでしょうか。二つでしょうか。私たちの歩みには必ず父なる神様の足跡があることを覚えましょう。わたしは運ぶ。背負って救い出すと言われる主の平安がいつも私たちにあることを覚えましょう。

## 結論

最後に一箇所みことばをお読みいたします。詩篇71:6

6 私は生まれたときから あなたに抱かれています。

あなたは私を母の胎から取り上げた方。

私はいつもあなたを賛美しています。

この賛美が私たちの歌でありたいと願うものです。2021 年の祝福を覚えつつ、来る 2022 年も神様がともに歩んでおられる足跡を刻んでいきましょう。

